

# 加倉井砂山と日新塾の教育

鈴木 嘆一

1. 日新塾は加倉井砂山（文化2（1805）年～安政2（1855）年：享年51）が茨城郡成沢村西坪（水戸市成沢町）の自宅に開いた私塾。門人数、設備、教育科目——水戸藩最大規模の私塾。北関東でも随一か。

- ・砂山——諱（いみな）は、久雍のち雍、字は立卿、通称は淡路、砂山のほか西軒、頼菴（らいあん）、不知老齋の号。
- ・父は久泰。砂山はその次男。  
兄久繼が文政3（1820）年、27歳で死去。  
→16歳で家督を継ぐ（出府の意志を断念）
- ・加倉井家は代々同庄村屋。この地方の素封家・名望家  
久泰——郷士（50石）→西坪に家を新築→天保10（1839）年没（79歳）

2. 砂山——天保10（1839）年 全隈村兼帶庄屋

天保12（1841）年 山横目兼務  
天保14（1843）年 格歩行士列

→ 同村同族の加倉井忠珍に学ぶ

立原翠軒 → 山本北山  
→ 亀山鵬斎

- ・家督を継ぎ、郷村子弟の教育に専念。  
はじめ、父の私塾（門弟20～30人）の補佐役。  
→ 20歳頃から父に代わって責任をもつ立場に。

3. 門人の増加

- ・文政9（1826）年 22歳——塾舎三楽樓（3間5間の2階建て）

↓  
会沢正志斎「君子有三樂」揮毫

- ・天保13（1842）年 38歳  
偕楽園好文亭落成——齊昭、詩会開催  
→砂山の名声も高まる。

- ・塾舎有隣館増築（4間6間の平屋造り）  
行伍塾、万甫楼、日新舎も  
「三楽樓、不知老齋、行伍塾、万甫楼、有隣館、日新舎、皆書斎名也」  
(興野道甫の砂山墓碑銘草稿中にある文章)

#### 4. 30余年に及ぶ教育活動、その門人数は？

- |                      |       |        |
|----------------------|-------|--------|
| ・「子弟三千各長苗」(102人～60人) |       |        |
| 嘉永元(1848)年           | 44歳   |        |
|                      | 8月10日 | — 72人  |
|                      | 8月11日 | — 75人  |
| 同3年                  | 2月11日 | — 60人  |
| ?                    | 15日   | — 91人  |
|                      | 16日   | — 102人 |
|                      | 17日   | — 70人  |
|                      | 6日    | — 81人  |
|                      | 7日    | — 84人  |
|                      | 8日    | — 73人  |
|                      | 9日    | — 70人  |

- ## ・近郷2里半くらいまで—— 通学範囲

寄宿生 —— 30~40 人？

「茶話睦講」——近郷の老若男女に。

#### 5. 教育方針 —— ①個性の尊重（墓碑名参照）

## ②時代の進運に即応する教育

- ・「おのか唐学のみおや加倉井淡路のきみハ、歌よむわさハさらなり、五十とせはかりのをり、蘭学し玉ひ、いとまのみをりにハ、和蘭字うつし学び玉ひけるに、とみにみ病ひにてみまかり玉へるゆゑにえとけたまハすなん」  
(興野道甫「道志留倍」より)

道甫は文政元（1818）年生まれ、茨城郡高久村組頭加藤木信衛門の長男。21歳の時興野助右衛門の養子となる。12歳で入門。のち塾長。

- ・道甫、袴塚翁（山横目袴塚重右衛門か？）の紹介で入門。

「初で文選はかく大学ハかくといふことををしへられたり、いといとうれしき事になん・・・・このころハ故郷の実家殊に窮たるときにて麦米ハ勿論なへてのくひもの都てとほし、大勢の子供にていかにもくらしかねたり、孝経一巻かひもとめたくおもひけれともそをもとむる力なくてなん、孝経の価ハ百四十位なるへきにあハれるさまなり、油もしさはしたへて寒中夜着となんいへるものをきて庭にいてふみよみたりき、加倉井先生ハもちろん袴塚翁にもとしの暮にハそれそれ謝礼をもすへき事侍れと一文もなければ拠なくて汗などなかしき、先生ハいととふとき人にて礼記の貧者不

以賦といへるをひき玉ひて仰られたる事ありき，そのうれしさいまに忘草のいかに忘れ侍るへき，おのれふみこのめるをめてたまひて，とまりなハこのふみをしへたまふへしと被仰き」（無題の小冊子）

#### 6. 教育科目 〈文武共習が特色〉

- ・学芸 —— 読書，習字，作詩，作文，歴史，地理，窮理，兵学，時事問題（往来物，「実語教」→四書・五経 → 「平家物語」・「太平記」，「史記」・「資治通鑑」・記紀・「万葉集」・「古今和歌集」）
- ・武芸 —— 剣術，砲術，馬術，教練
- ・その他 —— 医書多数所蔵（茨城県立歴史館に 624 部，1824 冊。大部分が医書。）
- ・実地訓練

十万原（水戸市），徳化原（城里町）

鉄砲の稽古 —— 月の 5 の日，邸内に射的場あり。（屋敷配置図参照）

剣術は神道無念流

乗馬 —— 馬 3 頭飼育（7 の日）

↓  
天保 14 (1843) 年 3 月，齊昭に扈従して出府 → 高島流砲術を修め帰る。

#### 7. 藩内は党争が次第に激化の時勢

- ・一党一派に与することを嫌い，党派を超越して教育に専念。  
「烈公の冤罪を蒙るに，藩士党を建てて相轡す。……藩党正と称し奸と称す，……遂にこれを度外視す。」（「砂山先生伝」石川忠和「砂山詩纂」より）
- ・砂山自筆の書簡（別紙参照）

#### 8. 主友・門人たち

- ・興野道甫，光岡多治見，斎藤監物，川崎八右衛門，香川敬三，藤田小四郎，飯田軍蔵，石川忠和など。  
→ 様々な人勢航路，地方の私塾の門人群像

#### 9. 砂山の教育の影響

- ・郷村社会の生活に深く根を下ろして家業に励み，教育に専念  
→ 砂山の精神を各地に伝え広めたこと
- ・中には尊攘思想の洗礼を受けて，政治意識に目覚め，現状打破を叫ぶ志士に。
- ・実業家や医者としての活動を通じ地域に貢献。

卷之三

文化7(1810)「武芸上覽御用留」より  
表10 武芸指南者一覽（文化7年3月）

姓	名	指揮者 人數	儀 械	指揮者 人數	儀 械
原	田兵助、岡本野水、酒井平衛門、猪飼伝八、深沢茨衛門、谷田部藤七郎、西尾昌治平、山内義左衛門、布施太郎八、白石又右衛門、佐久間伝五郎、天野弘治郎、布施太郎八、林十左衛門、片山太郎吉、隆山又十郎、猪瀬三郎大夫、并出弦八郎、三宅十衛門、浅重兵衛、渡辺久介、佐藤謙次郎、駒井源次郎、駒田八十郎、谷田部藤七郎、奥山市之衛門、加治平内、河野利左衛門、谷佐之衛門、高橋与之衛門、金木【】	9	槍	原田兵助、岡本野水、酒井平衛門、猪飼伝八、深沢茨衛門、谷田部藤七郎、西尾昌治平、山内義左衛門、布施太郎八、白石又右衛門、佐久間伝五郎、天野弘治郎、布施太郎八、林十左衛門、片山太郎吉、隆山又十郎、猪瀬三郎大夫、并出弦八郎、三宅十衛門、浅重兵衛、渡辺久介、佐藤謙次郎、駒井源次郎、駒田八十郎、谷田部藤七郎、奥山市之衛門、加治平内、河野利左衛門、谷佐之衛門、高橋与之衛門、金木【】	9
居	西尾誠、住田誠、小田源平左衛門、市毛谷渾四郎、伊藤左一衛門【】、鬼丸謙次郎、虎庄吉、市毛谷渾四郎、伊井謙次郎、宮田三郎介、内、三木謙次郎、鶴賀安平、佐藤謙次郎、進	7	長刀	西尾誠、住田誠、小田源平左衛門、市毛谷渾四郎、伊藤左一衛門【】、鬼丸謙次郎、虎庄吉、市毛谷渾四郎、伊井謙次郎、宮田三郎介、内、三木謙次郎、鶴賀安平、佐藤謙次郎、進	7
兵	川原源太郎、堀口庄太夫、栗田郡司、三谷弥太（大剣）、中山半衛門、鳴海弥衛門、白須又藏、坂内出次衛門（両剣）	14	法	川原源太郎、堀口庄太夫、栗田郡司、三谷弥太（大剣）、中山半衛門、鳴海弥衛門、白須又藏、坂内出次衛門（両剣）	14
劍	梅沢次郎、坂内忠次衛門、山本新五郎、芳賀王兵衛、武平次（町同心）、海改五郎、分赤井惣衛門、石野源次郎、小田野野一郎、嘉藤次（町同心）	8	術	梅沢次郎、坂内忠次衛門、山本新五郎、芳賀王兵衛、武平次（町同心）、海改五郎、分赤井惣衛門、石野源次郎、小田野野一郎、嘉藤次（町同心）	8
柔	内藤林之平、堀口庄太夫、河野利左衛門、岡本小兵衛、矢野長九郎、国分弥次衛門【】	6	長劍	内藤林之平、堀口庄太夫、河野利左衛門、岡本小兵衛、矢野長九郎、国分弥次衛門【】	6
陣	白須又藏、天野龍衛門【】	2	陣	白須又藏、天野龍衛門【】	2
兵	谷壹十郎、安藤三郎衛門【】、谷左之衛門【】	3	鎌	谷壹十郎、安藤三郎衛門【】、谷左之衛門【】	3
軍	富田利介、井上廉左衛門、山本新五郎、佐野孫兵衛、德大寺左兵衛，根本新平、岡本小兵衛	7	甲	富田利介、井上廉左衛門、山本新五郎、佐野孫兵衛、德大寺左兵衛，根本新平、岡本小兵衛	7
軍用	池上新衛門、渡辺太郎左衛門、太田彦衛門、太田彦八郎、桃屋半次太、佐野四郎衛門、庄五郎衛門、柳原新次郎、佐々謙殿介、尼子久藏、鳴海可衛門、芦崎次郎、朝倉福母之介、佐々木雲八	14	射	池上新衛門、渡辺太郎左衛門、太田彦衛門、太田彦八郎、桃屋半次太、佐野四郎衛門、庄五郎衛門、柳原新次郎、佐々謙殿介、尼子久藏、鳴海可衛門、芦崎次郎、朝倉福母之介、佐々木雲八	14
軍用	聯子十八衛門【】、岡山次郎兵衛、多賀谷勘兵衛、安松伊織、美濃部又五郎、竹谷忠衛門、高山角馬、跡部田治、河方の藏、尾崎繪太夫、神代季大夫、陶井謙次郎、佐藤謙次郎、白石丹波次衛門、横屋半太夫、松平源藏	16	鐵砲	聯子十八衛門【】、岡山次郎兵衛、多賀谷勘兵衛、安松伊織、美濃部又五郎、竹谷忠衛門、高山角馬、跡部田治、河方の藏、尾崎繪太夫、神代季大夫、陶井謙次郎、佐藤謙次郎、白石丹波次衛門、横屋半太夫、松平源藏	16
軍	大田原伝内、河方善兵衛、濱谷竜左衛門、小川喜衛門【】、岡見治太衛門【】、江幡市市左衛門【】、堀口幸介、岡見流七、堀野伝三郎，後藤源三郎，丹次	11	馬	大田原伝内、河方善兵衛、濱谷竜左衛門、小川喜衛門【】、岡見治太衛門【】、江幡市市左衛門【】、堀口幸介、岡見流七、堀野伝三郎，後藤源三郎，丹次	11
軍用	加藤云之衛門【】、石川治左衛門【】、岡見甚内、益子小作、新本郡金衛門、堀和角之九、根本新平、梅泽源太郎、本郡金衛門、新本宗左衛門、德大寺左兵衛，富本源藏、松村伝七郎、市川吉【】、太田【】	5	火薙	加藤云之衛門【】、石川治左衛門【】、岡見甚内、益子小作、新本郡金衛門、堀和角之九、根本新平、梅泽源太郎、本郡金衛門、新本宗左衛門、德大寺左兵衛，富本源藏、松村伝七郎、市川吉【】、太田【】	5
軍用	根本四郎衛門	4	水	根本四郎衛門	4
軍用	遠山忠三郎、前田介十郎	1	臘	遠山忠三郎、前田介十郎	1
軍用	三島宗	1	火	三島宗	1

## 學問・手習い塾

文化6(1809)「武芸上覽御用留」より

素11 手習讀書指南と門人數

指 南 姓 名	手写號書子供人數	備 考
立 寛 原 翠 軒 右	5 ~ 6 20	内 2 人詰切
飯 島 田倉 裕 菊 慎	○ 8 ~ 9 9	
利三郎 久 八兵衛妻	14 ~ 15 ○ 5 ~ 6 20	
昌 嘉大夫	○ 10 20	女子ばかり
(同) 篠 長次郎	26	
安松 宇佐美 都	○ 8 ~ 9 ○ 5 ~ 6 5 ~ 6 △ 5 ~ 6	都合12人程
繁 久五郎 懿八郎	68	都合98人程
秋 山 豊之助	△ 30	都合33人程
飯 村 審 吉	△ 20 □ 3	都合26人程
久保田 栄 助 蔽	22 ~ 23 ○ 22 ~ 23	都合28 ~ 29人程
西 野 菊 地 小八郎	△ 2 ~ 3 ○ 2 ~ 3	
堀 口 庄 大夫	10	
河野 利左衛門	5 ~ 6	
梅 沢 孫太郎 啓	5 ~ 6 △ 9	
梶 間 池 永 宅	15	
池 7 ~ 8 ○ 5 ~ 6 △ 6 3 ~ 4 ○ 3		都合28 ~ 29人程
五百城 軍 蔵		
神 長 忠五郎 弥一衛門		
瀬尾		

文化6(1809)「武芸上覽御用留」より

素11 手習讀書指南と門人數

人程	元金方手代	
	△ 40	○ 都合55人程
金 沢	普請方手代	
	△ 15	○ 10
小 沢	矢倉方手代	
	○ 12～13	○ 12～13
大 清	山田吉郎紀先手同心	
	△ 10	○ 5～6
水 東	肴方手代	
	△ 10	○ 10
新 十 郷	町方内物書	
	△ 10	○ 10
新 金	高山勤左衛門支配同心	
	△ 7～8	○ 40
新 金	本三町目	
	△ 7～8	○ 50
新 金	本四町目該河星赤兵衛	
	△ 7～8	○ 30
新 金	鶴居	
	△ 7～8	○ 30
新 金	都合37～38人程	
	△ 7～8	○ 30
新 金	都合48人程	
	△ 17～18	○ 30
新 金	本五町目	
	△ 17～18	○ 30
新 金	曲尺手町ふじや	
	△ 6～7	○ 30
新 金	都合11人程	
	△ 6～7	○ 30
新 金	官下住居	
	△ 5	○ 11
新 金	元郡方手代	
	△ 5	○ 20
新 金	浪 人	
	△ 5	○ 4
新 金	白銀町	
	△ 5	○ 32
新 金	吉田大宮司支配内匠卒	
	△ 5	○ 10
新 金	註 △は換子、 □は学問のみ、 ○は手習のみ、 ◎は読書のみ	
	◎は読書のみ	
新 金	42	
	42	
新 金	より転載	
	〔化6(1809)「武芸上覽御用留」は茨城県立歴史館所蔵	
新 金	：鎌木曉一1987『水戸藩学問・教育史の研究』吉川弘文館	
	著者	

※文化6(1809)「武芸上質御用留」は茨城県立歴史館所蔵  
出典:鈴木寛一 1987 水戸藩学問・教育史の研究』吉弘文館

部合28~29人程

勘定所手代

142

1

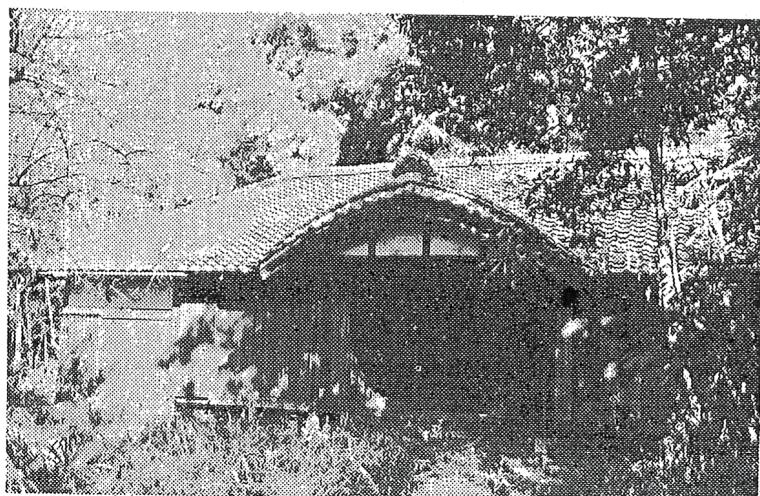
鈴木暎一氏講演資料①



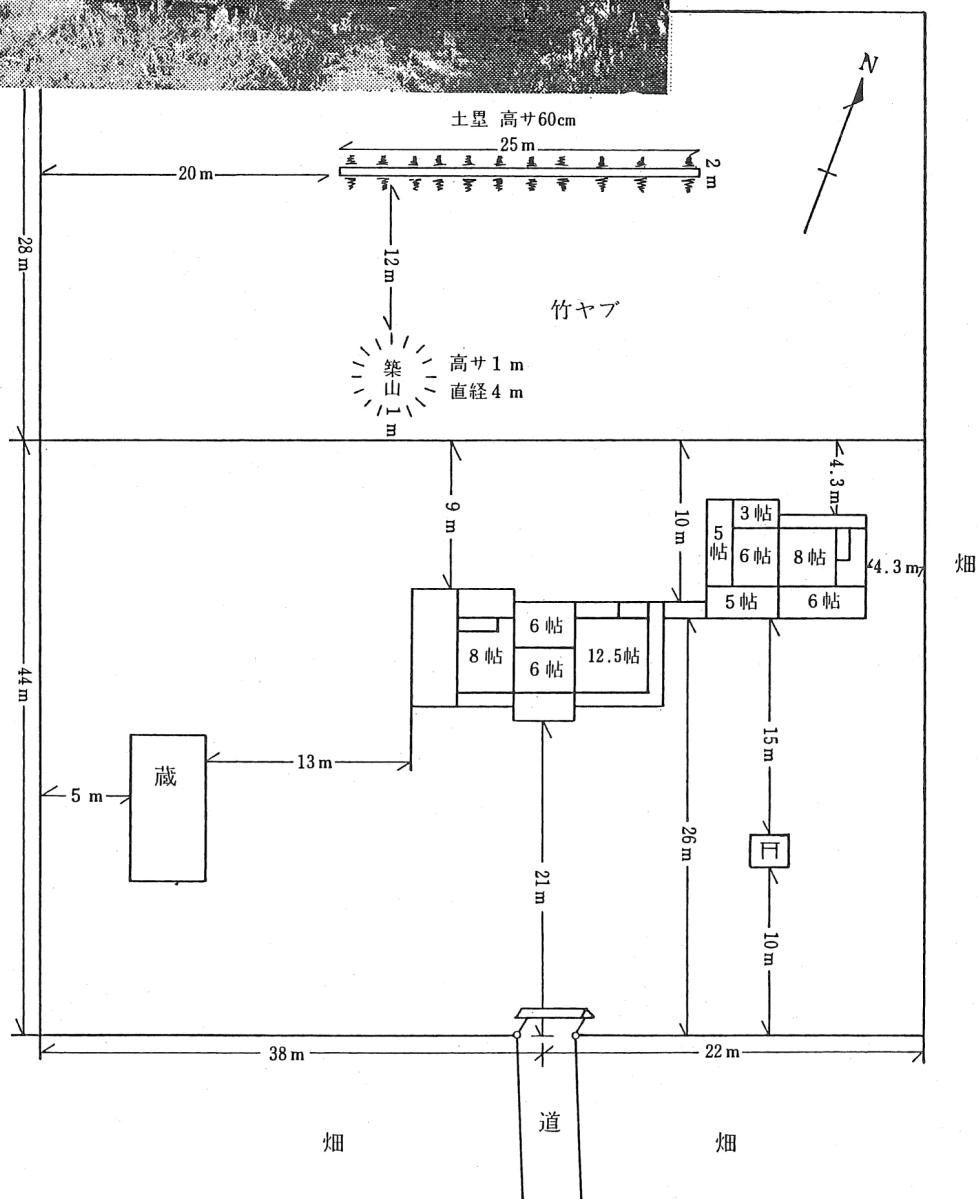
「青門肖像」(一部) 水戸市立博物館寄託 (水戸市立図書館所蔵)

鈴木暎一氏講演資料②

第16図 加倉井砂山宅（正面）



第17図 加倉井砂山宅配置図（現況）



『水戸市史中巻（三）』より転載

鈴木暎一氏講演資料③

1. We will be there  
2. It's 10 o'clock  
3. I'm going to  
4. See you later  
5. The first one  
6. I'm here  
7. I'll see it off  
8. I'm going  
9. I'm going to  
10. See you

John H. Smith  
H. Smith

興野家所蔵（水戸市立博物館保管）

鈴木暎一氏講演資料④